

# 飢えと混乱を生きたること

梅崎春生「飢えの季節」論

はじめに

梅崎春生「飢えの季節」(「文壇」一九四八年一月号)は、食糧統制法のもと制定された一日三枚の外食券で生きる男が、飢えによって生活を支配され、食だけを楽しみに生きていく様子を描き出した作品である。

敗戦直後、日本は極度の食糧難に陥り、配給される食糧のみでは人々は日々の生活を乗り越えることができなかった。実際に食糧統制法を遵守し餓死する者もでており、実質的な生活と制度上の統制のあいだに、埋めがたい乖離が生じることになった。そうした社会を背景として、いわば人々の生活を支える自由マーケットとしての闇市が各地に

生まれ、あらゆる生活物資を賄っていくことになる。

「飢えの季節」では、そうした敗戦直後の一九四五年末の東京を舞台に、復員してきた「私」が食糧不足に苦しみながら生きるさまが、二年後から回想するかたちで描かれている。都心の住宅不足から稲田堤に間借りする「私」は、毎朝空腹で目覚め、お茶の水の外食食堂で朝食を食べ、神田の広告会社で働いている。外食券での食事だけでは空腹を満たすことが出来ず、芋や柿などを盗みながら生を繋ぐ「私」は、一日中食物のことばかり考えている。

「充分食べている階級と、充分食べていない階級」しかないと考えたり、「ひとかけらの芋のために全世界を売って」も「良くなりつつある事を恐れたり」と、「私」の認識のあり

渡 部 裕 太

ようは、「食」というひとつの要素によって強烈に支配されている。

作品終末部において、勤めていた会社が日給三円、つまり一食分の外食券の閨値と同じ金額しかもらえない、とわかったとき、「私」は、「ある勇氣」を抱いて会社を辞める。その会社の入っていた焼けビルは「飢えの季節の象徴」とされ、そこから二年経った語りの現在時においても飢えが続いているという「私」の独白をもって、物語は閉じる。

このように食欲に支配される「私」を、これまでの研究は、「エゴイズム」と結びつけて論じてきた。

古閑章<sup>2</sup>は、「私」の危機意識は、「私」の考える『構図』の破壊に収束してゆくように思われる。それは飢えによってなし崩しにされる自己喪失の不安に帰着するといつてよい」として、飢えによって「自己崩壊の危機」に晒される「私」が、「ある勇氣」を胸に「新しい生き方を求める」とをとりあげ、「この場合、「ある勇氣」は「蜷」の男の生き方を透かして「羅生門」の下人の勇氣を連想させる。その意味で、「飢えの季節」は、内容的に「麵麴の話」や「ある少女」に接続しながら、その一方で、「蜷」の力強いエゴイズムの肯定を含み持つ作品に仕上がっているのである」と論じる。

また、木村功<sup>3</sup>は、人間関係をも食欲に代替させて認識する「私」について、「(愛情)〈親近感〉すらも、欲望(食欲)の転倒した姿であるというこの認識は、食糧第一という戦後の生活原理に対する痛烈な風刺となっている」とし、「戦争に代わる食糧難という舞台の上で、戦後を生きる人間たちのエゴイズムと抱き合った多様な姿が、〈新しい文学〉の内容として直接に、あるいは風刺を交えながら描き出されていた」と論じている。

それに対して高橋啓太<sup>4</sup>は、梅崎春生の世相小説が「エゴイズム」という観点から読まれることの多さを問題視し、「世相小説Ⅱエゴイズムの表白というこれまでの位置づけでは見えてこない独自性が、「飢えの季節」にはあるのではないか」と論じる。「飢え」を中心に据え直して読み解く高橋は、作品の結末部を、「私」がどのような生活をしているかはわからず、ただ「流転の生活が私に始まった」と記されているだけであるとし、「給料をもらって食糧を買うという生活が不可能だとわかったことで、エゴイズムの肯定に進むというのがこれまで読まれてきた単線的な物語だとしたら、ここではそれが宙吊りにされている」と論じている。

高橋の研究は、「エゴイズム」というキーワードで作品を

切り取ることを拒み、「飢え」そのものに焦点化するという点で、本稿と問題意識を共有している。だが、「エゴイズムの肯定」が「宙吊りにされている」物語として読み解くだけでは、「エゴイズム」という概念そのものからは逃れられていないといえるだろう。

「飢え」の問題が「エゴイズム」の問題へと帰着してしまふのは、作品の舞台となった一九四五年の、あるいは語りの現在時である一九四七年の、「飢え」と「エゴイズム」の実体を、論者が捉え切れずにきたことによるのではないだろうか。

そこで本稿では、これまでの論では等閑視されていた語りの現在時と作中時間の問題、つまり一九四七年から一九四五年を語っている、という問題を取り扱い、資料から四五年、四七年の闇市の在り方の差を浮き彫りにすること、一九四五年の「私」に訪れた「ある勇氣」と、「エゴイズム」という評価とを切り離すことから始めたい。その上で、「飢え」として括られた状態が単一の位相で説明しきれないことに着目し、「私」のなかの理想／現実の別を明らかにする。そして、作品後半で「私」に迫り来る「さまざまの構図」という社会認識と、これに伴う「私」の変化を分析することを旨とする。この作品の「私」のありかたは、梅

崎の他の小説のように「エゴイズム」という内面の問題で説明できるものではない。むしろ、「私」が他者と自己とを配置した、「さまざまの構図」という外部への眼、現実認識の獲得にこそ特徴があるのである。

## 一、闇市という場の実像と「ある勇氣」の正体

「飢えの季節」は、「戦争がすんでまだ四箇月も経たない」頃、一九四五年一月から一二月頃を舞台に描かれている。終戦を起点に考えたとき、この作品には、ふたつの語られない時間が流れていることになる。ひとつは「私」が「貧窮の底」に落ちこむまでの四ヶ月間であり、もうひとつが退職後の二年間である。

まずは、「私」が「今の勤め先」に入るまえ、終戦からの三ヶ月あまりを考えてみたい。

戦争がすんでまだ四箇月も経たないというのに、私はあらかた持物を売りつくして、止むなく今の勤め先に入ったという訳であった。復員後ただちに上京してみると、私がつとめていた会社のあたりは焼野原になっていて、焼けのこったくさむらの中で蟋蟀がいないのだけであった。社はどこに行ったのか判らなかつ

た。こんな具合で私はうやむやの中に失業したのであった。そして二箇月ばかり売り食いしてあそんだ。だから金銭的な意味では、私は貧窮の底にいたのだ。

「私」は復員とともに失業し、その際持ち帰った物品を「売り食い」しながら生活していたことが明かされている。やがて売れるものがなくなり、「私」は神田の広告会社に就職する。

ここで注目すべきなのは、「私」が「持物を売り」ながら生きていたことだ。というのも、初期の闇市は、まさに「私」のしたように、本来露天商人ではない者達が売り物を広げることによって形成されていったからである。松平誠<sup>5</sup>は初期の闇市について、次のように述べている。

都内の鉄道駅前に、ゴザを広げ、蜜柑箱を並べて、いち早くひしめいていたヤミ市の人びと、それを第一世代と呼ぶことができるならば、かれらのほとんどは、本来の露天商人ではなかった。それまでは、それが職業を持ち、生計を営む術を知っていた人びとであった。「中略」それを束ねたのは、戦争前からの露天商人たちであったが、ヤミ市商売を実際に手掛ける

じめた者の多くは、露天の商売とはまったく無縁な人たちであった。

松平はこのような初期の闇市の参入者について、「その一日の露天商売もあれば、箆筒の奥から引き出してきた品物を並べて売り出す、リサイクル・パザールの走りのような人たちもいた」としている。そのような経験を経てきた「私」にとって闇屋は、決して特別な存在、自身と隔った存在ではあり得ない。とすれば、作品結末部で「私」が想像する闇屋は、古閑の言うような「エゴイズムの肯定」によって導き出される「新しい生き方」ではない。「私」はすでに、「ヤミ市商売を実際に手掛けるじめた者」のひとりとして、語られない三ヶ月あまりを過ごしてきたのである。

また、闇屋そのものも、「ある勇氣」を胸に「エゴイズム」に突き進んでいくような悲壮さとは無縁の職業として成り立っていた。そのことについて、茶本繁正<sup>6</sup>は次のように論じている。

「電車にもまれて工場に通勤し、一日五円の給料を貰うより、買出しでもやった方がずっと気が利いてい

る。今まで勤めの余暇では都内では一貫目十五円の諸しか買えなかったが、ルンペンになれば（失業すれば）千葉県下まで買出しに行けるので、一貫目八円で手に入るようになった。月に五回の買出しだけで汽車賃を引いても二〇〇円の金が浮く」（『朝日新聞』20年11月29日）

いかえればマジメに勤めればソンをするという、まともな勤労意欲を持ってない時代だった。ここから闇買出しの職業化がはじまり、それが闇市をささえる仕入れルートの一つとなった。闇市全盛時代は一億総闇行為時代だったといえるのである。

茶本が紹介する新聞記事がまさに示しているように、一九四五年一月という作品舞台は、「マジメに勤めればソンをする」時代だった。職を辞して闇市になることを想起する「私」のありかたは、決して「私」の「エゴイズム」を示すものではなく、ごく一般的な時代感覚といえる。そしてそうした職業的な「闇買い出し」は、都心の食糧を支える闇市の重要な仕入れ方法のひとつであった。

闇屋がごく一般的な職業として成立していたことは、当時の闇市の形成が「復興」として報道されていたことから

も判断できる。終戦から丁度二ヶ月後、一九四五年一〇月一日に発行された「アサヒグラフ」では、「復興する店舗」と題し、八枚の写真に掲載した記事が巻頭に配されている。写真は新宿マーケットと浅草仲見世のもので、靴、木綿糸、しゃもじの売買の様子や、うどん屋などが写されている。記事から引用してみる。

こんなにも東京は焼けたのか——戦争中はさう思はなくても、さて敗戦といふ冷厳な事実のうちに戦争が終つてみると、いま更のやうに東京の廃墟が目につく。だが、それもしばし、いま東京の商店街は新しい日本建設の声と共に続々と復興しつつある。

「中略」そしてたとへそれが露店であらうと、葭州張りの貧しい小屋であらうと、浅草の仲見世をはじめ店舗の復興とともに、いままで見当らなかつた品物が続々と店頭姿を現はした。

写真が紹介された新宿マーケットは、「光は新宿より」をキャッチフレーズに終戦のわずか五日後、八月二〇日に誕生した最初の代表的な闇市である。それが「東京の商店街」として、「復興」の一例として紹介されていることは、

闇市および闇屋が当時極めて肯定的に認知されていたことを十分に示すだろう。「私」の特異性はむしろ、こうした時代において、闇屋を続けずに就職していったことにこそあるのだ。

それでは、なぜこうした闇屋行為と、「エゴイズム」とを結ぶ読解がなされてきたのだろうか。その原因の一端は、もうひとつの語られない時間、つまり一九四五年から一九四七年末までの空白にある。

一九四六年ごろから順次強化されていった取締りによって、闇市は必然的にアンダーグラウンドとしての色合いを強めていく。語りの現在時である一九四七年末時点では、闇市への圧迫は非常に強まり、都内の飲食店は一部を除き営業禁止とされた。その頃の闇市統制について、猪野健治<sup>7</sup>は次のように述べている。

G H Q—政府—警察が闇市掃討に執念を燃やしたのは、そこに禁制品が並んでいたからではない。闇市という特異な「解放区」を通じて、日本人窮民、朝鮮人、台湾人の大群が結ばれ、革命的に連帯していくことになによりも恐れたのである。

G H Qの闇市対策のうたい文句の一つにそこを仕切

る親分、子分組織を叩きつぶし、ボランタリー・チェーンに再編する——というのがあった。「中略」G H Qは、親分、子分組織を「日本民主化」のガンと受けとめていた。

つまり、一九四五年の「私」の想起する闇市と、一九四七年の「私」が語る闇市との位相は、「G H Q—政府—警察」による強力な統制によって、明確に隔てられているのである。

ところがこれまでの研究は、統制強化後の、ブラックマーケットとしての闇市を「飢えの季節」に読み込んできた。論者が闇市・闇屋に対して持っていた先入観が、作品読解に多大に影響しているのである。作品の舞台である一九四五年の闇市の実体を可視化することの必要性に対して、これまでの研究は無自覚であった。そのことが、「エゴイズムの肯定」へ進む「私」、という読解へと繋がっているのだ。

みてきたように、「ある勇氣」は、常に「エゴイズム」と組み合わされて論じられてきた。こうして闇市のイメージを同時代的な理解へと引き戻し、闇屋へと転じることが「エゴイズム」から切り離されたとき、テキスト内に描かれ

た「ある勇氣」はどのように立ち上がってくるだろうか。

まず、「ある勇氣」が「胸にのぼってくる」までの経緯を詳細に確認したい。

「私の給料が月給でなく日給であること、そしてそれも一日三円の割であることを知ったときの私の衝動はどんなであっただろう」と、給料が日給三円であることを知った「私」は「衝動」を覚える。この「衝動」は、「すぐ胸の奥で消えてしまつて」、そのかわりに「水のように静かな怒り」が湧いてくる。この「静かな怒り」とともに、「私」は「辞める決心」を固める。辞意を課長に伝え、「ここを辞めたらどうなるか、という危惧」を「どうにもならないこと」と打ち消したとき「私」が感じているのが「ある勇氣」であり、「盗みもする必要がある、静かな生活」という未来に絶望したとき引き替えに生じて来るのが「ある勇氣」だ。「私」に「衝動」を抱かせたのは「一日三円」という金額だけではなく、「給料が月給でなく日給であること」でもある。「私」が求めていたのは「静かな生活」である。「私」が期待していたのは、月給制で、しかも「静かな生活」をおくるだけの金額の給料、ということになる。この月給という制度への期待は、「私」が利根的な「飢え」の解消ではなく、恒久的な安定を求めていたことを示している。

こうした「私」の期待が反転したところに立ち上ってくるのが「ある勇氣」であるならば、「ある勇氣」とは、「静かな生活」を諦め「流転の生活」へ踏み込む勇氣、つまり月給制の勤め人としての安定した生活を諦め、その日その日の食い扶持を稼ぐ不安定な生活へと飛び込む勇氣である。闇屋と乞食の老翁が同列に想起されている事から考えても、そこに適法／違法という問題は内在していない。「ある勇氣」は、安定との訣別の勇氣なのである。

ここで問題となるのは、「私」をその決断へと導いたものが、単に「飢え」のみで説明できるのか、ということだ。それは、すでに初期闇市の参入者であったはずの「私」が社会の動勢に背くように就職したのはなぜか、という問いでもある。それに答えるために、「私」にとつての「飢え」、食欲とはなにか、ということ拾い上げてみたい。

## 二、「飢え」と食欲

「私」の「飢え」は、本文冒頭から登場する。「その頃の私は、毎朝四時に眼がさめた。」という書き出しに続けて、その「いつもひどく悪かった」「覚めぎわの気分」は、以下のように説明される。

寢覚めのときというものは、普通の男なら皆あらあらしく精気にみちている筈なのに、なぜ私だけがそんな眼覚めかたをするのだろうか。私の肉体が病んでいるわけでもなかった。精神が絶望しているわけでも更になかった。ただひとつ、私にそんな寢覚めを強要するただひとつは——つまり私の腹が極度に減っているからなのであった。

「普通の男なら皆あらあらしく精気にみちている筈」の朝は、「腹が極度に減っている」という食欲によって上書きされてしまう。「飢え」ははじめから、性欲とむすびつくように登場するのだ。食欲と性欲が未分化のままにおかれたような描写は、この直後の食物の想像にもつづいていく。

「豚肉の煮たものや秋刀魚の焼きたて。また菌ごたえのある沢庵。烏賊のさしみ。アスパラガス。あたたかいシチウ。玉子焼」「鰻の蒲焼。肉の揚物。木の芽あえ。田楽」など、思いつく限りの食物が列挙され、「私」はそれを「私はじつくりと全身をもって舐めまわしながら、また次へ移ってゆく」。それらの食物は、「聯想の乳房」と表現され、「私」はその「乳房」を次々に取り換えるように食物を想像しつづける。

こうした食欲と性欲が錯乱した想像は、「食物の幻想のオナニー」と表記される。そして毎日の習慣となっているその「食物の幻想のオナニー」は、「私」が通勤に利用する「南武線」の「始発電車のひびき」によって断ちきられ、「私」は幻想から現実へと引き戻されるのである。

こうした毎日の所作によって、「私」の食欲と性欲との混乱は、現実認識のなかにまで侵食しつづける。

すすけた鉄色の入組んだ、袋のような形や棒の組み合わせわさった電車の下部構造が、あらわに私の眼に映じてくるとき、私はなにか醜悪な色情をそれを感じるころがあった。そしてそれは私の空腹感とまじりあって、あるやりきれない気分として私の胸にひろがってくるのであった。

「私」は「電車の下部構造」に、「醜悪な色情」を感じるようになっていく。それは毎日の「食物の幻想のオナニー」が、電車のひびきによって断ちきられてしまっていることと無関係ではない。目覚めからはじまり電車によって引き戻される、という一連の「オナニー」の習慣が、性欲と食欲との錯綜を「私」の視覚そのものにまで敷衍してきてい



るのである。「長山アキ子のふくらんだ頬べたが麵麴みた  
いに見えてきたりする」という「私」の混乱した視覚が会  
長でも庶務課長でもなく、長山アキ子にのみ向けられる、  
というのも、この性欲と食欲との錯綜と無関係ではありえ  
ない。

ただし、「私」が電車から感じる「色情」を「醜悪」だと  
判断していることは重要な問題を含んでいる。このとき  
「私」は、「昌平橋のもとにある外食食堂」へと向かつて  
いる。そしてその外食食堂の食事は「貧寒な食事」とされ  
ている。この、食事に対するイメージが、そのまま「醜悪  
な色情」と組み合わされているのだ。一方で「食物の幻想  
のオナニー」で取り上げられたのは、豚肉の煮たものや秋  
刀魚の焼きたて、鰻の蒲焼などの、外食食堂で食いつなぐ  
「私」には手の届かない食事であった。幻想、夢想などと呼  
ばれる「オナニー」としての食物と、貧寒、醜悪などと組  
み合わされる外食食堂の食物とは、明確に区分されてい  
る。

空腹を満たすという「私」の欲望は、作中で充足される  
ことはない。だがそのなかでも「私」は、手の届きうる「醜  
悪な」食物と、決して食べられないであろう「幻想」の食  
物とを切り分けて認識している。「外食食堂」や「ふかし芋

だとか黒麴麴」などの「安くて腹一杯になるもの」での「飢  
え」の充足は、「醜悪」の位置に置かれているのである。  
また、「私」の「飢え」は、ただ「私」に苦痛のみ与え  
るもの、としては描かれていない。

またはるばる二時間も電車にゆられて、稲田堤に  
戻って行く途中私は、三食で済ました日は割当だけで  
辛抱したというかどで、ある満足を感じることもあつ  
た。しかしその満足には虚脱したような苦痛がかなら  
ず伴っていた。

この「満足」は、間借りしている農家のあるじに呼ばれ  
お茶を飲む時に、芋に手を伸ばすのを我慢しながら感じる  
「嗜虐的な快楽」と同種のものである。「私」は自身の身体  
的、生理的な欲望を意志によって抑制することに、ある種  
の快楽を感じている。ところが「私」の意志は、ときに容  
易に、生理的欲求に負けてしまう。

私は乏しい銭の中から十五円をさいて、あるじから  
芋を一貫目求めておいた。「中略」十五円は相場場で、決  
して安いわけでもないのだけれども、結局安いものに

ついた。というのは、私はときどき人目をぬすんで土間からひとつふたつと芋をちよるまかして、私の風呂敷に補充したからであった。そんな行為をなすことに  
おいて、私は胸がいたまなかつたわけではない。しかし直接私に来るものは、良心の呵責というような正統派のものではなくて、おそろしく惨めな敗北感であった。「中略」この行為が衝動的なものでなく、計画的であることが、私の嫌悪をもっともそそのものであった。

意志が欲望に負ける、というのは、「衝動的」に盗みを働いてしまう、ということではない。そうではなく、身体の要請に応じるかのように、意志そのものが「飢え」を満たすための「計画」を立ててしまうということ、つまり、意志の統制から生理的欲求がはみ出してしまうのみならず、身体欲求に意志が服従してしまい「私」そのものが欲望の充足のためだけに振る舞ってしまう、ということである。「私」はそうした自己を発見することに「おそろしく惨めな敗北感」を抱くが、これは意志が身体に敗北した、という感覚のことを示している。欲望と意志とが相克して存在として「私」は描かれるのである。

このことと、さきの性欲の問題とを考え合わせると、

「私」のなかでの意志／欲望は、「食物の幻想のオナニー」／「外食食堂」の関係と重なり合っていることがわかる。意志や「思想」、「芸術家のたましい」などは、「幻想」のよ  
うに手の届かないもの、保持できないものとして位置づけられ、現実的な欲望によって揺さぶられ続けているのだ。

「私」にとつての「飢え」は、一面的なものではない。性欲に「幻想のオナニー」と「醜悪な色情」が両立していたように、食欲においても理想的な食品（鰻の蒲焼など）と現実的な食品（外食食堂、芋など）がある。そのように、理想／現実が折り重なるありかたは、そのまま「私」の意志／身体のありかたと接合しているのである。

そうした「私」の自己認識は、挿入される「四十歳位の老兵」のエピソードによっても説明される。「それは人間の眼ではなかった。ひとつの欲望だけがぎらぎらと露呈した眼であった。」という、残飯に目を奪われた老兵についての記述は、「私」にとつて、相対化するべき自己像として立ち上げられている。

「私」は「飢え」が満たされることを望みながら、「飢え」という生理的な欲望に全的に支配されてしまうことを極度に恐れている。そんな「私」がとっている戦略は、生理的な欲望としての「飢え」を「醜悪」の位置に押し込め、そ

の上に「理想」としての食物への欲望、つまり「食物の幻想のオナニー」を位置づける、というものである。老兵のように「ひとつの欲望」によって完全に支配された人間を想起することによって、「私」は自身の欲望を理想／現実の二面に切り分け、迫り来る「醜悪」な欲望の要請から自己を遠ざけ、意志／身体の相克状態を維持しようとする。

「私」にとつての「飢え」とは、このような、意志と身体との緊張関係のなかに生じる闘争を維持し続ける、ということに他ならないのである。

### 三、敗戦という転換、連続する時間

「私」の「飢え」を確認した上で、「私」が初期闇市の参入者から脱して就職することを選び、そしてその職を辞めることを選ぶ、その二度の変化の理由に立ち返りたい。

広告会社の編輯部員である勤め人としての「私」の一日は、「宮城遙拝と会長どのへの敬礼」から始まる。「私」はそのことを不本意におもい、「戦争も終って世の中が大きく転換しようというのに」と不満を抱きながらも、「給料を貰って飯をくうためには仕方がない」として従っている。

「毎朝の社長の訓示」にある「この度は文化国家の建設とデモクラシイの啓蒙運動に全力をそそぐ」ということばも、

宮城遙拝と矛盾する「少々おかしなこと」だと考えている。

「私」は会社では「大東京の将来」というテーマを与えられており、「この焦土の上に、どのような大東京がたてられるのか。そんな未来の東京を夢想することが、ここでの私の仕事であった」と認識している。ところが、その「私」の認識は誤りであったことが、編輯会議で会長によって指摘されることになる。

「——大東京の将来というテーマをつかんだら」しばらくして会長ははき出すように口をきいた。「現在何が不足しているか。理想の東京をつくるためにはどんなものが必要か。そんなことを考えるんだ。例えば家を建てるための材木だ」

会長は赤らんだ掌をくやくやくにや動かして材木の形をしてみせた。

「材木はどこにあるか。どの位のストックがあるか。そしてそれは何々材木会社に頼めば直ぐ手に入る、とこういう具合にやるんだ」

「私」が「文化国家」の理想と「食物都市」という自身の理想とを織り交ぜて、東京の都市計画を構想しようとして

いたのに対し、会長は広告会社としての仕事、つまり宣伝看板をつくり、企業から資金を受けることを考えている。「私」が所属するのが一企業であり、そこで行われているのが「慈善事業」などではなく「儲け仕事」であること。そのことに「私」は、「大東京の将来」構想を提出したのちにようやく気が付くのだ。

会長の声を受けとめながら、椅子に身体を硬くして、頭をたれたまま、私はだんだん腹が立ってきたのである。私の夢が侮辱されたのが口惜しいのではない。この会社のそのような営利精神を憎むのではない。佐藤や長山の冷笑的な視線が辛かったのではない。ただただ私は自分の間抜けさ加減に腹を立てていたのであった。

ここで「私」は、「佐藤や長山の冷笑的な視線」を感じとっているが、この二人も「色々鎌をかけたたりした場合、私にむかって未来の大東京はかくあらねばならぬ、というようなことを講義までして聞かせ」ていたのであり、つまり広告会社の仕事としての「大東京の将来」構想の企画意図は、編輯部の誰にも伝わらず、全員が「文化国家の建設

の啓蒙」の目的の下に「大東京の将来」を考えていたのである。広告会社の編輯部員全員が、仕事として広告看板を作る、という意識をもっていなかったというこの異常の根底には、社会に対しての、会長の認識と編輯部員の認識のずれが横たわっている。

「私」は、「戦争も終って世の中が大きく転換」しつつある、という認識のもとに生活している。「現代にはふたつの階級しかない」として「充分食べている階級と、充分食べていない階級」を構想する「私」の考え方は、敗戦によって過去にあった階級制度が完全に崩壊し、「外見や身分」で区分できない、新たな階級制度が成立していることを想定しているものだ。一方、会長の考え方は「儲け仕事」というひとつの認識の軸が、一切揺るがされることなく戦中から戦後にかけて連続している。敗戦とは会長にとって、ただ取り扱う商材が変化しただけのことなのである。

さらに、「稲田堤のあるじ」もまた、仕事を軸にして戦中戦後を連続した時間として生きる存在として設定されている。「徹底的な保守家」「保守反動の輩」として描かれるあるじは、やはり会長とおなじように、「私」のいうところの「充分食べている階級」に位置している。

敗戦直後の混乱期において、「静かな生活」を本気で希求

していた「私」もまた、本質的には、戦前的な生活を想定していたのかもしれない。少なくとも、闇屋的な「売り食い」生活をやめて就職したとき、「私」は戦前の会社勤めのころのような「静かな生活」に回帰しようとする意図と、もはや敗戦前のような階級制度や組織体系は完全に崩れ去ったという社会認識とを、自分にとつては矛盾なく内面化していたのである。

ところが、勤め人としての生活にもどった「私」に突きつけられたのは、戦中からの連続した時間を生きる者が食い、新しい社会の中で「文化国家の建設」を考えようとする者が食えずにいる、という現実だった。「私」は崩壊し去ったはずの「階級」によって、再び絡め取られているのである。

#### 四、迫り来る「さまざまの構図」

「充分食べている階級と、充分食べていない階級」のなかで、「もつとも侮蔑される階級に属している」と自己規定してきた「私」だが、その単純な社会意識は「さまざまの構図が、ひっきりなしに心を去来」してくることで、突き崩される。ここでは、その「さまざまの構図」について考察してゆく。

しきりに胸を熱くして来るものがあつて、食物の味もわからない位だった。私をとりまくさまざまの構図が、ひっきりなしに心を去来した。毎日白い御飯を腹いっぱい詰めて、鶏にまで白米をやる下宿のあるじ、闇売りでずいぶん儲けたくせに柿のひとつやふたつで怒っている裏の吉田さん。高価な蓑をひっきりなしに吸って血色のいい会長。鼠のような庶務課長。膝頭が青白く飛出た佐藤。長山アキ子の腐った芋の弁当。国民服一着しかもたないT・I氏。お尻の破れた青いモンペの女。電車の中で私を押しして来る勤め人たち。ただ一食の物乞いに上衣を脱ぎごうとした老翁。それらのことばかり妄想し、こそ泥のように芋や柿をかすめている私自身の姿がそこにあるわけであった。

あらゆる人物が「充分食べている階級と、充分食べていない階級」の二つに別けられていたのに対し、ここでは「私」を取り囲むように、登場人物たちが個別に立ち上がっている。

この羅列された登場人物たちのなかで特徴的なのは、T・I氏だ。「私はまだその頃T・I氏に面識はなかつ

た」と語られているように、この時点ではT・I氏は、あるじとの茶飲み話の登場人物にすぎない。「私」とT・I氏  
が知り合い、「私」にとつて彼が「さまざまの構図」の一要  
素となるのは、一九四五年から四七年の間はずである。  
ところが、四五年の「私」が自身を取りまわっている「構図」  
を認識するこの場面において、いまだ面識のないはずの  
T・I氏も、他の登場人物たちと同列に扱われている。こ  
のように、一九四七年時点での「私」の認識や価値判断が  
挿入されていることの意味については、のちに触れること  
にしたい。

あるじの家に「食事付」で下宿していたT・I氏は、「私」  
のふたつの階級に沿って考えれば、「充分食べている  
階級」に含まれたはずだ。ところがここでは「国民服一着  
しかもたないT・I氏」と表記される。「さまざまの構図」  
を想起する「私」のなかで、「充分食べている階級と、充分  
食べていない階級」という認識が絶対性を失い、二つの  
「階級」では区分しきれない現実に「私」が直面してしまっ  
ていることの証左であろう。

T・I氏以外の、「構図」として取り上げられた人々につ  
いても考えてみよう。「私」と佐藤や長山とは、先述したと  
おり、社会認識という点を共有している。では、「私」は会

社を辞め、佐藤と長山とは「待遇改善の争議」を起こす、  
という結末の違いは、何から生じているのだろうか。両者  
を隔てているものもまた、食だ。食事の内容、「貧寒」さ、  
という意味ではない。どこで食事をとっているかである。

「私」は外食食堂で食事をとり、佐藤と長山は、会社内で  
隠すように弁当を食べている。会社内に留まる佐藤と長山  
は、会社という組織内で、階級の問題と向き合わざるを得  
ない。そのことが、「待遇改善の争議」という、団体の運動  
としての抵抗へと繋がっている。一方で外食食堂で食事  
をとる「私」は、「脱落した風貌の連中」のなかにも、「青  
いモンペの女」のように充分に食べている人々がいること  
を目の当たりにし続けている。

闇屋として生計を立てる彼らは、まさしく戦後の混乱  
期、無秩序状態となった焼け野原に出現した、新しい集団  
である。会長やあるじのように、戦中から連続した時間を  
生きることで食えている人間ではない。「階級」という戦前  
的な社会体制から逸脱したところに、組織ではなく個人と  
して生きている主体なのだ。編集部員の中で「私」だけが、  
その有様を横目にみながら食事しているのである。

また、物乞の老爺も、同じく階級制度から逸脱した存在  
であると言える。さらに、着ているものを差し出して食を

乞おうとする老爺は、身辺のものを「売り食い」していた「私」の、あり得た未来の姿でもある。

自宅と会社においては、戦中からの連続を生きる人々を、そして外食食堂の周辺では、戦後の新しい混乱に生まれた人々をみてきた「私」だけは、「静かな生活」と社会の大転換とが両立しえない、という現実にとどり着く契機を得ているのである。

そうした認識が、「私をとりまくさまざまの構図」としての社会把握を生み出し、「私」を揺り動かす。「さまざまの構図」「たくさんの構図」として社会を把握するようになった「私」にとって、敗戦によってなんら変わることはない。会長やあるじの考えも、敗戦によって無条件に変革が引き起こされたという過去の自身の考えも、もはや信じ切るこゝとが出来ない。食える／食えないという二項対立的な「階級」認識も、結局は現実を図式的に切り分ける所作を戦前から引き継いだものに過ぎない。社会の転換、混乱は、そうした図式化が不可能な、「さまざまの」かたちで「私」の前に現出しているのである。

「私」は「さまざまの構図」というかたちでしか認識できなくなっている混乱した社会を知ること、自身のなかにあった二項対立的な「階級」としての社会把握を捨て、そ

の上で「私は私の道を切りひらいていく他はな」い、と考へはじめ。それは「構図」に含まれる種々の登場人物たちの生き方を模倣することでも、「階級」のなかを甘んじて生きることもない。それらとは別個の、「私の道」を探し求める決意である。

「ある勇氣」が「静かな生活」を諦め「流転の生活」へ踏み込む勇氣であり、安定を諦める勇氣であるとき、「私」が選び取った「流転の生活」とは、単に不安定なその日暮らし、という意味だけにおさまらない。敗戦という契機をみつめなおし、戦前戦中からの価値観を引き摺った社会から訣別し、新しい日本が作りあげられていく混乱のなかで「私」だけの「道」を進んでいく、という勇氣なのである。会社を辞めた「私」は、「電車みちまで出てふりかえる」と、曇り空の下で灰色のこの焼けビルは、私の飢えの季節の象徴のようになしくそそり立っていたのである」と語る。「焼けビル」という表現から、周辺一帯が空襲で焼かれていることがわかる。

「焼けビル」は戦災の象徴でもあり、また一方「私」にとっては、戦中と連続した時間を進んでいく会社の象徴でもある。「私」は、「焼けビル」のなかに「宮城遙拜」がおこなわれるような日本が続いていたことそのものを、「飢

えの季節の象徴」として「ふりかえる」のである。

## 五、「私の道」と一九四七年

「私は私の道を自分で切りひらいてゆく他」ない、と決意は語られるものの、その「私の道」の具体像は作中で明示されてはいない。闇屋や乞食を思い「そこにも生きる途がひとつはある筈」だと考える「私」にとつて、「私の道」は固定的なものではなく、無数の可能性のなかを「切りひらいてゆく」ものである。だが後日談がごく僅かであるが描かれることによって、「私の道」のかたちは示唆されている。

それを明らかにするために、「飢餓の季節はこれで終わったわけではない。それから二年経った今でも私の飢えはつづいている」と語りながらも、勤め先の「焼けビル」こそが「私の飢えの季節の象徴」である、と語る「私」について考察したい。

あの会社も、その後どうなったのかよく知らぬ。私をやめて二箇月程して、新聞紙上でその会社に待遇改善の争議が起ったことをよんだ。そのリーダーとして、あの佐藤と長山アキ子の名前が記されていたので

ある。そしてそのことで会長が激怒して、即日二人をクビにしたといったような記事であった。私はその記事を、飢餓と貧窮のどん底で読んだ。

ほんとに私は何と長い間おなかを空かせてきたのだろう！

「私」が辞めて二ヶ月程で、会社に労働争議が起ったことが明かされている。「私」は「飢餓と貧窮のどん底」にありながら、そのことを「新聞」で読んで知った、とされる。新聞記事を読む「私」という造型は、明らかに作中の一九四五年末の「私」とは隔てられている。「私」は「飢え」のことのみ始終頭を悩まされている存在として描かれていた。ところがそこから二ヶ月程で、「私」は「飢餓と貧窮のどん底」にあつてなお、新聞記事を読み、社会の動向に眼を向けるようになっていく。

このとき重要なことは、「私」が相変わらず「飢餓と貧窮のどん底」にいる、ということではない。そうではなく、「私」が「飢餓と貧窮のどん底」のなかにあつてなお、その「飢え」そのものでなく「構図」、すなわち社会に眼を向けている、ということなのだ。「私」は、「さまざまの構図」にとりかこまれた自己を見出すことによって、そしてその



なかで「流転の生活」を生きることを決意したことによって、混乱した社会と自己の置かれている状況とを確認しながら生活しているである。

また、「さまざまの構図」のなかに、四五年には面識のなかったT・I氏が挟み込まれていることはすでに述べた。作中、T・I氏の作品は「天文学のかけらが散らばったような」「幻想にみちた小説」であるとされている。「私」の「流転の生活」のなかで、そうした作品を描くT・I氏は「構図」に組み込むべき十分な性質をもって立ち現れたことになる。「現実家」から最も遠い存在として提示されたT・I氏が、四七年の「私」にとっては「構図」に挿入すべき人物となっていること。そのことは「私の道」が、食べるかどうか、という現実的な要素でのみ選択されたものでなく、「芸術家」をも射程に収めた「さまざまの構図」のうちに展開されてきたことを示している。だからこそ、「私の道」を進む過程で、T・I氏と面識をもつに至っているのだ。

一九四七年の「私」は、今でも「飢え」が続いていると告白し、そして「ほんとに私は何と長い間おなかを空かせてきたのだろう！」という叫びで物語を閉じる。

さきに確認したように「私」にとっての「飢え」とは、

自身の欲望を理想／現実に取り分け、意志と身体との緊張関係を維持しつづけることであった。「おなかを空かせてきた」ということばは、二年間の「私の道」が、そうした闘争の中で拓かれてきたことを示している。そして「構図」という社会認識を得た「私」にとって、切り分けるべき理想／現実の対象は、食物への欲望のみに留まらない。

「さまざまの構図」として迫り来る現実を正視し、その上に「思想」や「芸術家のたましい」などの理想を位置づけ、手の届かないそれらへの欲望を持続させること。それこそが、一九四七年の「私」が示す「飢え」の位相なのであり、「私の道」なのである。

### おわりに

本稿では、作中の時差に着目し、また「さまざまの構図」を取り上げることで、「飢えの季節」の読解を図ってきた。現実の上に理想を置く「私の道」が切りひらかれるためには、まず「私」の眼を身体的欲求や「幻想のオナニー」から切り離し現実へと差し向けることが不可欠であった。「飢えの季節」は、自身の身体によって生活を全的に規定されていた「私」が、「さまざまの構図」という社会認識の獲得により戦後日本の現実に眼を向け、社会のなかで理想を

欲望しはじめる物語なのだ。

この理想は、「エゴイズム」という内的視線から導かれる現実的な、実現可能な位置のものではない。そうではなく、敗戦後の社会のなかでは保持し得ない「思想」「たましい」なのであり、それらはいまの日本社会では決して手が届かないというその非実現性そのものによって、持続的に理想たりえているのである。

## 【注】

1 茶本繁正は外食券について、「闇の中の生活」（東京焼け跡ヤミ市を記録する会編『東京闇市興亡史』草風社 一九七八年八月）のなかで次のように語っている。「外食には『外食券』という政府発行の食券が必要だった。この外食券ははじめのうちは自分が指定して登録した外食券食堂にしか使えなかった。外食券の正式の名称は「主要食糧選択購入切符」、発行者は農林省、電車の回数券のような一帖綴りになっていて、一枚ごとに「一食券」と印刷してあった。」

2 古閑章「梅崎春生の世相小説―『飢え』をキーワードとして―」（近代文学論集）一九九二年一月号）

3 木村功「戦後」を抱きしめて―梅崎春生の戦後認識―（『解釈と鑑賞』二〇〇五年一月号）

4 高橋啓太「『飢え』とエゴイズム―梅崎春生「飢えの季節」を中

心に」（りりばーす）二〇〇三年一〇月号）

5 松平誠「ヤミ市 幻のガイドブック」（筑摩書房 一九九五年七月）

6 茶本繁正「闇の中の生活」（東京焼け跡ヤミ市を記録する会編『東京闇市興亡史』草風社 一九七八年八月）

7 猪野健治「露天闇市の終り」（東京焼け跡ヤミ市を記録する会編『東京闇市興亡史』草風社 一九七八年八月）

8 T・I氏については、古閑、高橋が、稲垣足穂がモデルであると指摘している。

9 労働省労務局労働法規課編『三訂新版 労働組合法 労働関係調整法』（労務行政研究所 一九八八年一月）によれば、「昭和二〇年（一九四五年）八月二十五日、敗戦により、日本の労働組合運動は、初めて公然かつ自由な発展を許されるようになった。特に連合国最高司令部がその管理政策上民主主義的勢力の一つの重要な基盤としての労働組合の保護助成について積極的な関心を示したことにより、それをめぐる法制の整備もまた戦前の事情に照らしてまさに画期的なものがあつた。その最初の立法となつたのが昭和二〇年一月の労働組合法（いわゆる二〇年法）の制定である。」とされている。同法の施行が一九四六年三月一日であることを考えると、佐藤と長山が争議を起こしたのは、日本の労働関連法令がGHQ指導下で再編されはじめようとする、まさにその時である。それに対して「即日二人をクビにした」会長のありかたが戦中と連続した態度であることを示す、ひとつのエピソードとして挿入さ

れているのである。

【附記】梅崎春生の本文引用は、すべて沖積舎版『梅崎春生全集』第二卷（一九八四年六月）に拠る。また、引用中の「」記号内は本稿執筆者によるものである。

なお、本稿は二〇一五年度立教大学日本文学会大会（二〇一五年七月四日 於立教大学）における口頭発表をもとに加筆修正を行ったものである。ご教示下さった多くの方々に深く御礼申し上げます。

【キーワード】梅崎春生、「飢えの季節」、戦後、闇市、飢餓

（立教大学大学院博士課程後期課程）